

## なぜ二つの児玉源太郎像と二つの山口県人創立百貨店は台湾に残ったか

—児玉像と菊元商行、ハヤシ百貨店取材記(2016-2018)—

Why did the two Gentaro Kodama statues and two Yamaguchi prefectural foundation department stores remain in Taiwan :

Kodama statue and Kikumoto department store, Hayashi department store coverage (2016-2018)

李岳道・楊佩蓉・陳福川・紙矢健治

キーワード：児玉源太郎像、台湾、菊元商行、林百貨店

### I. はじめに

桃園市の大溪慈湖紀念雕塑公園(The Cihu Sculpture Memorial Park)にはおびただしい数の蒋介石像が集められている<sup>1</sup>。慈湖は蒋介石の慈湖陵寢とその息子の蔣経国の大溪陵寢を中心とした「両蔣文化園區」一帯の総称であり、台湾人にとって両蔣とは蒋介石、蔣経国親子を意味する。最近では台湾の本土化政策の影響のもと国内に設置されていた蒋介石像が撤去後、ここに集められ、その数は増え続けているために、一帯は中国人観光客を中心に200万人が訪れる景勝地ともなっている<sup>2</sup>。本稿のテーマは「なぜ二つの児玉源太郎像と二つの山口県人創立百貨店は台湾に残ったか」であるので、なぜ蒋介石、蔣経国親子のことから始めるのか？それには先の大戦の終結によって1945年10月25日に、日本から一旦、連合軍中国戦区司令の蒋介石に主権が引き渡された瞬間から1947年2月28日に起こった228事件、そして蒋介石の国民政府が四川成都か

---

<sup>1</sup> 桃園市 HP (<https://travel.tycg.gov.tw/ja/travel/attraction/797>) を参照されたい。なお、同市は行政院(内閣)直轄市であり、日本の行政制度の都道府県の「都」にあたり、13区からなる。面積は1,220平方キロメートル、人口219万人。大溪区は同県中央部にあり、また新北市に隣接する。

<sup>2</sup> 中国・海峡旅行社ホームページ <http://www.cststour.com.cn/GlobalView.asp?ID=311> などを参照されたい。

ら朝鮮戦争が始まるおおよそ半年前に台北に遷都するまでに台湾で何が起こったのか、そのことについて台湾では現在、その歴史について向き合う作業が進められている<sup>3</sup>。この蒋介石の評価の変化こそ、児玉源太郎像、菊元百貨店、ハヤシ百貨店の再登場と復元が今なぜ行われているのかというテーマに直結するものであるので、本稿では、蒋介石権威主義体制の見直しと児玉、菊元、ハヤシの関係を述べたいと思う。

1949年秋前後において、児玉像や菊元百貨店、ハヤシ百貨店が一体どうなったのかを知ることは、それらが現代台湾とどうつながってきたのかの鍵となる。二つの児玉像、その一つは台北に温存され、もう一つは台南で破壊された後、頭部だけが発見され、その場所は史跡に指定され、各々異なる方法で温存され続けた。一方、菊元百貨店は隠され、ハヤシ百貨店は復元され、史跡に指定された<sup>4</sup>。これらをまとめることによって現代台湾の政治意識がどのように変遷してきたかを理解できるのである。単純に「親日」や「反日」という2002年ごろに登場した新語では語りつくせない複雑なるものがそこにあることを本稿で伝えたい。

## II. 1996年以降の変化について

38年間にわたって施行されていた戒厳令は、世界的に見ても異常なものである。外省人と本省人の確執がいかに先鋭な状態にあったものを長期間、隠しておくほど、大きなものであった。児玉像や菊元百貨店、ハヤシ百貨店が表に出てきたのは、228事件の真相究明から90年代の李登輝の「中華民国在台湾」と

---

<sup>3</sup> 日本統治時代終了(1945年10月25日)から蒋介石国民政府の撤退までの約4年間とは、台湾の人々にとってどのような時代であったのかを客観的に見つめる作業を言う。

<sup>4</sup> 凌宗魁「帷幕後の菊元百貨(上):行政操作凌駕專業評估的文資審議」『聯合新聞網』2017年2月17日。<https://opinion.udn.com/opinion/story/10829/2281766>

凌宗魁「帷幕後の菊元百貨(下):臺北市能否包容新舊空間共生共存?」『聯合新聞網』2017年2月17日。<https://opinion.udn.com/opinion/story/10829/2283590>を参照されたい。凌宗魁氏は国立台湾博物館勤務、菊元百貨店の保存(史跡指定)に大きな役割を果たしている。2017年9月の取材には多大な協力をいただいた。直接のインタビューも収録できたので、別の機会に放送番組の中で紹介できるものと思う。

いう「本土化」政策における台湾を見つめなおす作業から始まった。それは去蔣化、文化創意政策、行政院不当党産处理委員会の発足などが続き、日本統治時代から現在までの歴史を直視しようという試みの中で児玉源太郎や菊元百貨店、ハヤシ百貨店が台湾の人々の前に登場することになる。

### 1. 228 事件調査研究について

228 事件の調査については、黄秀政教授が第一人者である。黄秀政教授は、筆者4(紙矢)の博士課程(1988-2001)時代の恩師である。228 黄秀政、『二二八事件研究報告』(台北, 時報文化出版公司, 1994.05, pp.1-504。頼澤涵、黄富三、吳文星、許雪姬共著)、黄秀政、《九二一震災災後重建實錄(摘要本)》(總主持兼撰稿人), 台北, 五南圖書出版公司, 2005.07, pp.1-639。(與陳靜瑜等合著)、黄秀政, 2006.02, 《二二八事件責任歸屬研究報告》(第二章, pp.13-94), 台北, 財團法人二二八事件紀念基金會, pp.1-590 などを参照されたい。また二二八事件紀念基金會に相当の調査研究の蓄積があるので参照されたい<sup>5</sup>。

### 2. 本土化について

李登輝が初の直接選挙により総統に当選した 1996 年に日本の中学校に相当する国民中学に『認識台湾』という課目、教科書が導入された<sup>6</sup>。それまでは台湾の歴史については、中国の歴史の地方史として位置づけられ、まさに台湾人の育成ではなく、中国人の育成のための教育が実施されていたが、李登輝の直接投票による総統の就任は、台湾を主体とする台澎金馬地区にある中華民国の歴史として、いわば台湾人育成のための課程と位置付けられ、その路線の変更については外省人を中心として激しい批判が展開された。陳水扁が第二代の民選総統に就任すると九年一貫教育の「社会学習領域」へと組み込まれてその名称はなくなったが、台湾を本土化とする路線は引き継がれた。

---

<sup>5</sup> 二二八事件紀念基金會 <http://www.228.org.tw/index.html>

<sup>6</sup> 國立編譯館(2003)『認識臺灣』(社会篇)(國一-07) 台北：鼎文書局、國立編譯館(2003)『認識臺灣』(歴史篇)(國一-07) 台北：鼎文書局がある。

### 3. 去蒋化

台湾では「威権体制」などとも言われる。日本では開発独裁とも表現される<sup>7</sup>。蒋介石の主義体制の象徴である蒋介石像を取り除くことを中心に進められてきた政策であるが、2008年から16年まで外省人の馬英九が総統となってからは、その動きはいったん止められることとなる。正名運動も在野の運動だけではなく、政権としての変化として陳水扁政権の際に中華民国パスポートに「TAIWAN」の国名が加えられたことや中華電信を英語では「China Telecom」から「Chunghwa Telecom」へと変更されたことなどが代表的な例であろう<sup>8</sup>。

(表 1) 去蒋化の代表的変化

年月	内容	変更職権者
1996年	台北市の旧台湾総督府庁舎前の大通りは戦後「介寿路」とされていたが、凱達格蘭路へと変更された。	陳水扁市長
2006年	旧台湾総督府庁舎は戦後、「介寿館」とされたが2006年に「總統府」の看板とした。	陳水扁政権
2006年	桃園県に完成した中正国際空港の名称を桃園国際空港へ変更した。中正とは蒋介石の字であった。	陳水扁政権
2007年	1976年に建設された台北市の中正記念堂の名称を国立台湾民主記念館に変更した。2009年になると馬英九政権により再び中正記念堂と名称を変更した。	陳水扁政権

### 4. 文化創意産業政策

政治的な論争以外の動きとして文化創意政策(略称は「文創」)があげられる。日本の方式では「アダプティブユース (Adaptive reuse)」に相当するのではな

<sup>7</sup> 吉田勝次(2000)『アジアの開発独裁と民主主義』東京：日本評論社、p126 と p129-138 までに詳しく紹介されている。

<sup>8</sup> 旧国営の中国石油会社は2007年に台湾中油(台湾中油股份有限公司 CPC Corporation, Taiwan)へ社名変更されたことなどもある。

いだろうか。台南市のハヤシ百貨店や旧台南州知事公舎などは、この文創政策によって復元されたものであると言える。特に後述するハヤシ百貨店の建築物は純然たる民間建築であって、六次産業、観光産業の見地に立って、文化的価値をそのまま復元し、史跡に指定したり、民間に委託して運営させたり、日本もこの政策に学ぶべきところは多い。文化创意産業政策は行政院が2002年5月に「挑戦2008：国家発展重点啓作」の一部として「文化创意産業を發展させる計画によって確定されたものである<sup>9</sup>。

### 5. 政党及其附隨組織不当取得財産処理条例と不当党産処理委員会

2016年7月に立法院(国会)で政党及其附隨組織不当取得財産処理条例が通過・成立し、8月に不当党産処理委員会が成立した。これは日本統治終了後に形成された中国国民党の財産について不当なものを探し出し、本来国家に属すべきものと判断されたものは返納させることを主たる業務とするものである。実は、この条例と委員会の成立の目的こそ、日本統治終了から228事件、蒋介石国民政府台湾撤退、戒嚴令期における中国国民党の党国体制に対する清算である。蔡英文政権が行政院(内閣)に不当党産処理委員会をつくったことは、現在のすべての政治問題の先鋭化の原因ともなっているが、この不当党産処理委員会とは「中国国民党が終戦後、台湾で取得した日本統治時代の資産の回収を目指す」<sup>10</sup>委員会であり、児玉や菊元、ハヤシと無関係ではなく、決定的なつながりがあるのである。

### III. 児玉源太郎の決定的功績について

言うまでもなく児玉源太郎は、長州徳山藩出身の日本陸軍の軍人である。日本陸軍中將から第4代台湾総督になり、1898年4月から8年余り、行政長官と

---

<sup>9</sup> 「Cultural and Creative Industry」「The Cultural and Creative Industries」とも訳される。

<sup>10</sup> 産経新聞 <http://www.sankei.com/world/news/160831/wor1608310047-n1.html>

なった後藤新平とともに台湾の財政的、経済的自立を達成した人物である。1906年夏になくなった当時、子爵・陸軍元帥である。

### 1. 一人の日本統治時代生まれの人の言葉

本稿は児玉源太郎の功績を客観的に伝えることが目的であるので、まずは知日派であり、「1942年早稲田大学を卒業し、のち中国大陆に赴き、抗日闘争に参加し、1949年中国人と台湾人の相違を確認して台湾に潜入、台湾独立運動を開始、1952年台湾武装隊を組織するが当局に発覚し、日本に亡命した」<sup>11</sup>人物、史明がこの時代をどう言ったかを紹介してから当時を振り返ることとし、児玉の決定的な功績に言及する。

19世紀後半……(アジアでは)日本だけが例外となって民族概念を接受し、国内で近代国家を建設する第一歩を踏み出し、これは日本近代史上新旧が交代する転換点となった。しかしながら、政治・経済的近代改革につれ、日本は思想・意識のうえでは「大和民族主義」を発展させていった。この前近代性を内に含む民族主義は、天皇を頭とする帰属・軍人・完了・政治家など封建残余勢力の支配階級を社会的基礎としたから、すぐさま「富国強兵」「対外拡張」の侵略主義に向かって発展した。……まず台湾・澎湖を奪取し、朝鮮・サハリン島を植民地とした。国内的には、しかし日本はいぜん旧習を墨守し、一貫して官尊民卑の天皇政治、兵力乱用、専制政治を維持した<sup>12</sup>。

児玉がなくなって約12年たって台湾・台北の士林に生まれた史明は一貫して台湾の独立を主張しているが、もともと日本統治時代の台湾に生まれた人物であるので、やはり当時の日本と台湾をあらわすその言葉にはするどさを感じる。

一方で台南市を拠点とする経済界の指導者の台南グループ(台南幫)の一人だった辛文恭先生は筆者4(紙矢)のゆかりのある人物であった。辛文恭は「台湾

<sup>11</sup> 史明(1991)『台湾は中国の一部にあらざ 台湾社会発展四百年史』東京：現代企画室、著者プロフィールを参照されたい。

<sup>12</sup> 史明(1991)『台湾は中国の一部にあらざ 台湾社会発展四百年史』東京：現代企画室、p90-91。

人の400年の苦難の涙ぐましい歴史を理解し、台湾人の祖先が海上の危険、生き別れの荆の道を経てきたのは只強権政治の圧搾はく奪陵虐惨殺やまぬ世界から逃れるためだということがわからなければ台湾人として生まれた悲哀は理解できない<sup>13</sup>と述べ、史明と同じような心境を吐露しつつも、日本統治を肯定的にみた。ところで、この悲哀については、李登輝と司馬遼太郎の対談で台湾では物議をかもしたこともある。

司馬が

台湾という島はかつて、だれのものでもないと考えられていた時代があったようですね。私は、他の国を植民地にするのは、何よりも他民族の自尊心という背骨を砕くことで、国家悪の最たるものだと思っています。ところで、明治4年(1871)、台湾の東海岸で琉球の人が殺された事件がありました。いったい台湾とはどこの国のものなのかと明治政府は考えた<sup>14</sup>。ことを対談が始まった時に言った。李登輝は、「司馬さんと話をするときどんなテーマがいいかなと家内に話したら、『台湾人に生まれた悲哀』と言いました。それから二人で『旧約聖書』の「出エジプト記」の話をしたんです<sup>15</sup>と述べた。

辛文恭は1936(昭和11)に台北帝国大学に入学した80人のうちの一人である。大部分が日本の内地人である中で、政学科に学んだ<sup>16</sup>。その後、台湾大学医学院教授となり、台湾医学界の重鎮となった李鎮源は同期であった。

台湾は日本の50年の統治がなければ、国弘長重氏がハドソンリバーを視察して建設した日月潭の発電所や八田與一氏が万里の長城の6倍も長い嘉南大圳水路を建設して台湾の耕地面積の3分の2を占める嘉南平野をうるおすことはできなかつた。海軍燃料廠(高雄、新竹、大甲)、アルミ工場、造船工場、製糖会社、鉄道道路其他のみるべき建設は勿論なく海南島よりも落後したにちがいない<sup>17</sup>。

---

<sup>13</sup> 辛文恭(1995)『素心雑記』台南：大興印刷所、p47。

<sup>14</sup> 司馬遼太郎(1994)『台湾紀行』(街道をゆく40)、p488-489。

<sup>15</sup> 司馬遼太郎(1994)『台湾紀行』(街道をゆく40)、p488。

<sup>16</sup> 台湾総督府文書『台湾総督府府報』2763号。

<sup>17</sup> 辛文恭(1995)『素心雑記』台南：大興印刷所、p47。

それらは、日本統治を礼賛するものではなく、万国公法や国際法を守り、着実な建設をした当時の日本人に向けられたものであって、台湾割譲のプロセスや第3代総督の乃木の時代までと、1937年に始まった日華事変後の日中戦争以降、加えて終戦とともに台湾の人々を「見捨てた」日本に対して向けられたものではないことはいうまでもない。

## 2. 矢内原忠雄の児玉源太郎観について

児玉が台湾に赴任してから、具体的ないくつかの功績がある。それは台湾総督府内の「官匪」と言われるべき1,080人と言われる官吏の駆逐(多数の内地帰還を含む)であるが、矢内原忠雄によると「土地調査事業、専売制、事業公債及び地方税の実施」<sup>18</sup>であり、

日清戦役後台湾獲得の当時において台湾の財政は主として我国国庫の補助に待たざるを得ず、明治29年度の歳入965万圓中補助金は694万圓、30年度の歳入1,128万圓中補助金は596万圓を占め、人をして台湾領有の本国に課する財政的負担の大なるに眉を顰めしめた。児玉後藤政治の一大眼目は台湾の財政的独立を期するにあり、明治32年度予算要求と同時に財政20年計画を発表し本国補助金を漸減して明治42年度以降独立自給するものとし、生産的事業の為には公債を起し37年度よりはその元利償却を差し引きて尚歳入剰余を見るの計画を立て着々実行を進めたが、日露戦争の起るに及び台湾財政独立の期を早むるの必要に迫られ明治37年度限り一般会計の補助金を辞退した。かくて明治29年度より42年度までに総額37,488,759圓の補助金を受くる計画なりしに対し、補助実額30,488,691圓を受けた後予定よりも早く台湾財政は独立したのである<sup>19</sup>。とあるように台湾の財政独立を短期に達成したことである。

ミクロ的な政治経済政策において最も重要なことは土地調査事業であり、

<sup>18</sup> 矢内原忠雄(1988)『帝国主義下の台湾』東京：岩波書店、p71-72。

<sup>19</sup> 矢内原忠雄(1988)『帝国主義下の台湾』東京：岩波書店、p70-71。



児玉総督後藤長官就任に当り第一に着手せし事業の一は人籍及地籍の調査であった。人籍に就ては明治36年戸口調査規定を制定し、内地に先立ちて近代的なる国勢調査の方法により、38年10月1日午前零時を現状とする第一回臨時戸口調査を行った。而して土地調査については明治31年匪徒の跳梁未だ跡を絶たざるの間に於て早く既に臨時土地調査局を開始し、地籍調査三角測量及地形測量の三種の事業を施行した。大租権は調査の結果之を確認すると共に明治36年12月5日限りその新規規定を禁止し、明治37年大租権者に公債を以て保証金を交付してその権利を消滅せしめた。即ち明治維新の際に於ける秩禄公債の如きものにして、之により封建の遺制たる大租小租の関係を消滅し、以前の小租戸を以て業主と確定し、登記を以て相続又は遺言による場合の外、権利移転の効力発生条件として強制した<sup>20</sup>。

この登記の権利移転の効力発生条件は「内地に於けるが如き単なる対抗条件にあらず」<sup>21</sup>と規定し「強制」し、制度的「矯正」を成し遂げたことを言う人は極少ないのである。これについては紙幅の制約で詳細な内容には言及しないが、黄政秀、張勝彦、呉文星(2002)によれば、

台湾の人口の実情を掌握するために、(台湾)総督府は1903年「戸籍調査令」を公布し、戸口調査の準備を進め、1905年10月1日より3日間第一次臨時調査を実施し、動員された工作人員は7405人に達し、18万5840円の経費を費やし、台湾史上初の人口調査がとなった。調査の結果、総人口は約304万人で、そのうち台湾人は298万人(内閩南人は249万人、客家系は約40万人、原住民は約9万人)で97.8パーセントを占めた。日本人は約5万7000人であった)で1.9パーセントを占めた<sup>22</sup>。

大租にあたる在来の大地権者である鷄籠(基隆)顔家、板橋(台北)林家、霧峰(台中)、打狗(高雄)陳家などが、日本と協同して製糖等の事業改良拡大するた

<sup>20</sup> 矢内原忠雄(1988)『帝国主義下の台湾』東京：岩波書店、p17。

<sup>21</sup> 矢内原忠雄(1988)『帝国主義下の台湾』東京：岩波書店、p17。

<sup>22</sup> 黄政秀、張勝彦、呉文星(2002)『台湾史』台北：五南圖書出版、p195-196。

めの経済的條件を整えたのは、実は児玉であった。土地調査事業により、大租戸が所有する広大な土地は公債となり、後述の通り日抛時代から日治時代という新次元を迎えた功績は、まさに誰にも否定できないものである。児玉の政策は、その後の台湾の経済的自立に大きな役割を果たしたことは、まぎれもない事実なのである。

ただし、南原繁や矢内原忠雄は日本の植民地拡大には相当冷静な態度であった。本稿の論拠とした『帝国主義下の台湾』の題名を決めたいきさつについて矢内原は、

私の本書は『日本治下の台湾』とも題されるべきものである。即ち主として日本領有以後日本の勢力の下に如何に台湾が発展したるかの研究にして……本書は事実の歴史的叙述を為さないではないが、私の主力を注げる処は事実の意味の説明である。……而して其意味其の性質たるや、独占資本主義段階としての定刻主義的特徴を備ふるものなるが故に、本書を題して『帝国主義下の台湾』と称するものである<sup>23</sup>。

と述べ、決して「帝国」を礼賛することを目的としていないことを示しているので、その論拠たる価値は揺るぐものではない。

#### IV. 問題の所在

##### 1. 本論の目的

日本統治が始まったのは、日清戦争(中国名：甲午戦争)の結果、下関条約(中国名：馬関条約)において澎湖諸島とともに台湾本島を1895年春に清国から割譲された時である。児玉が第4代台湾総督に就任したのは1898年のことであるが、それまで第1総督樺山資紀、第2代の桂太郎、第3代の乃木希典の2年9カ月、重慶国民政府と蒋介石国府台湾撤退までの4年余りの台湾社会といかに向き合うかと問題がここにある。この2つの時代は、前統治者から引き継いだ台湾の主権をどのように扱い、そのような混乱をもたらし、台湾本島人を

---

<sup>23</sup> 矢内原忠雄(1988)『帝国主義下の台湾』東京：岩波書店、序文を参照されたい。

どのように処遇したかという問題は今決着をつける新次元に来たと思えるのである。そして主権が変わった前を後の時代はどのような実態と特徴をもっていたのかを知る機会ともなる。

## 2. 日治時代か日抛時代かという問題

日本統治時代を「日治時代」と「日抛時代」という2つの呼称が使われる。日本人にとっては、2つとも妥当に見えるが、これらには2つのイデオロギーがあるように見られるほど先鋭なる論争がある<sup>24</sup>。日統時代とは、日本の統治を史実に基づいて客観的にみようとす見地であり、一方、日抛時代とは資源を収奪する植民地統治であったという見地である。正確に言えば、50年余りにも及ぶ日本統治には、その時期的にみてその両方の側面を持っていたと考えるべきであり、本論では両方が妥当であるとする。つまり、1985年から児玉が政策的転換を図かるまでと1937年以降の「八年抗戦」から終戦までは明らかに日抛時代と言える。これは肯定できない。しかし矢内原忠雄が言う1903年から1937年までの経済的自立の時代においては、日治時代と呼んでもいいのではないかと思う。

少なくとも1895年春から1898年春までの間、つまり樺山資紀、桂太郎、乃木希典の時代は、純然たる武力による統治であった。つまり日抛時代であったというべきであって、児玉が赴任してしばらくの間もやはり日抛時代と言わざるを得ない。宿利重一(1993)は

その頃は土匪が総督府を脅かすことさえも往々にしてあったというように、不穏なりしのみか、更により以上に怖るべき悪辣な利権漁り、植民地稼ぎが陸続入って当局を惑わしむるのみならず、台湾に赴く役人は、唯

---

<sup>24</sup> 陳明成「從自主選用的「日治」 到定為一尊從自主選用的「日治」 到定為一尊據從自主選用的『日治』到定為一尊據的『日據』、一以《公論報》、台灣新生及中央的刊載『文史台灣學報』第十期、2016年6月、p35-84が詳しい。また国立武陵高級中学の3人の書いた高校生の目から見た「日治與日據—政治力與歷史解釋的關係」というレポートがネット上で見られる。興味深いものなので特に紹介しておく。国立武陵高級中学陳榮聲先生の指導による。<http://www.shs.edu.tw/works/essay/2013/11/2013111423042625.pdf>  
葉淑貞(2014)「日治時代臺灣經濟的發展」『臺灣銀行季刊』第六十卷第四期、p224-273。

だ腰掛け式の観念に囚われて治績があがらぬという非難も起こった。この非難、啻に国民の間に喧伝した許りでなく、「如何に日本人が台湾を植民地として開発しうるか」と注目していた欧米人は、冷然として「日本人に植民地の経営は不可能である。台湾は最もよい実例ではないか」と嘲弄するようになったのである<sup>25</sup>。

また斎藤参吉が言うように「当時の台湾の情勢は、其領有が武人の手に依て為された為め、樺山桂乃木三総督の時代は、最も武人跋扈の時代であった。民政に関しても、殆ど武人の干渉せざるはなかつた。殊に乃木総督時代に於ては、最も其極点に達したと言われる」<sup>26</sup>時代であった。児玉・後藤が1,080人の台湾総督府の官吏を駆逐し、内地に追いやるなどした後、帰順を進める政策を行って、台湾の財政を健全化を図り出してから、中国側の言う「八年抗戦」が始まるまでを日治時代と言っていいが、日中戦争、正確には国際法の宣戦布告なき日華事変は一方的な侵略戦争であったとしか言いえず、その進行に台湾の人々を利用した現実を我々は直視しなければならない。

ただ、よく理解しておかねばならないのは、児玉の時代と先の戦争は時間的にも31年の時差があり、31年という時間的空間は、人の心（民族心、祖国観などを含む部分）にふれるものであることをまず理解しておかねばならないのではないだろうか。

### 3. コミュニケーションのことについて～本省人と外省人を含む言語環境

横澤史郎は、

従来統一をかいだ我が台政の実情は、土民と官吏との間に立つ通訳が喂りに私幅を擅にして彼我の事情が一向に通じない。台湾の土語は愚か支那語にも通じないで、月給猫ばばのデモ通訳が多かったのだから堪らない。後藤長官はこの弊風を観破して総督の同意を得、不良通訳の大掃蕩を行い、一方土民を諭して総督新たに任に就き、土民の帰服を喜よろこび汝等の一

<sup>25</sup> 宿利重一(1993)『児玉源太郎』周南：マツノ書店(復刻版)、p313。

<sup>26</sup> 斎藤参吉(1918)『渾身はれ策の人』『児玉藤園將軍』東京：拓殖新報社、p65。

家団欒を欲すること極めて切なるものありとの意を伝えしめ、若し帰順の意あるものには任意に官邸に来るを許し、疑あらば民政長官自ら行いて之を説かんと云う。向鉢巻の真剣だから、遠がにがに頑強な土民もその胆を破られて終つた<sup>27</sup>。

というように、現地台湾の人々とのコミュニケーションが、樺山、桂、乃木の時代においてとれていなかったことを重要視し、このことの解決に当たった。日本は台湾統治を始めるにあたり、北京官話の通事を連れてやってきた。武器を手に他人の土地に押し入るのであるから、旧来の人々にとって日本軍こそ「土匪」に見えたに違いない。しかも言葉が通じない軍隊がやってくるのだから、恐怖の次には憎悪が沸き起る。児玉源太郎が重視したのは、現地語を通じて在来の人々とのコミュニケーションをとることである。日本を単一民族の国家であり、単一言語の国だと誤解している。台湾を通じて理解できることは、台湾という場所は単一言語ではないということだ。太古の昔から単一民族単一言語の国というのは、この地球には存在しえなかった。台湾には、先住民族がおり、前史以前は平地に住んでいたが、400年余り前の鄭氏の活躍の時代になると対岸の福建省や広東省東部からの移民が増え、先住民族を圧迫すると、先住民族は台湾中央山脈全域または東海岸を居住地とせざるを得なくなった。ミクロネシア語系を中心とする先住民族は、十数種族おり、まさに先住民としての誇り高き人々である。例えば、ルカイ族の言語はタガログ語に近く、漢民族とは言葉も人種も異なる。漢民族には福建南部方言と広東梅州を中心とする客家方言などがあり、相互には通事を介さずに意思の疎通はできない。概ね大部分が福建南部方言を話し、客家語系の人々も千住民同様、比較的開墾が困難な場所に集中して居住する。下関条約(馬関条約)で「台湾は土匪が連なりに横行するし、その土民も殺戮を好む慍悍犖猛なものばかり…」と述べ、「化外の地」とも言ったとされるが、ようは言語的コミュニケーションの取れる者間とそうでない者との間には械闘があったことを外来の統治者として他人事のように申し

---

<sup>27</sup> 横澤次郎(1914)『藤園將軍逸事』台北：新高堂書店、p24。

述べたことは、台湾統治はコミュニケーションの克服から始まることを知らなかったということである。英国などは、国家の上に教会があって、下には軍隊がいて、そのまた下にカンパニーがあって、それらが東インド会社を形成したので、彼らは聖書の翻訳から始め、宣教師を通じて浸透する作法を心得ていたもので、清朝や日本(樺山、桂、乃木)は、まことにその「際」を知らなかった。(以上、横澤の記述に基づき著者なりの認識を述べた。)

児玉が優れていたのは、日本の国内の転戦のプロセスで得た高い異言語コミュニケーション能力ではなかったか？

## V. 二つの児玉源太郎像と二つの山口県人のデパート

児玉像は1908年ごろに作られた。当時は「II. 児玉源太郎の顕著な功績」において述べた通り日治時代も順調な滑り出しを見せ始めたころであり、鶏籠(基隆)顔家、板橋(台北)林家、霧峰(台中)林家、打狗(高雄)陳家を始め旧来の実力者との話し合いを重ねた結果、台湾統治のソフトランディングを果たした。横澤次郎の記述にも

民間の事業家などに対しても極めて懇ろに対応し、各種事業について將軍の聴納を求むるものには適當の便宜を與えて彼等の急を救い、時には彼等の足らざるを補って事業の成功を扶けたこともあった。彼の南部の陳家(陳中和)、北中部の林家なども、家政の紊乱を黙示し兼ねてその財政を整理すべく部下をその局に当らしむると云う有様、隊長又は陸軍次官当時と打って変わった同情に富む温乎たる好爺となつた<sup>28</sup>。

と直接的な記述を残している。

### 1. 台北の児玉像

国立台湾博物館は日本統治時代につくられた、イタリア製造である。高雄の陳中和など台湾の有力者や在留邦人らが募金をして作られた。

---

<sup>28</sup> 横澤次郎(1914)『藤園將軍逸事』台北：新高堂書店、p34。

日本が台湾を接收したその年は台湾にとって転換期であり、それは陳中和にとっても転機となった。当時、日本軍の上陸は三方に分かれて行われ、南台湾は主に劉永福を主とする抗日勢力の殲滅から取り掛かった。日本語に通じる陳中和は商人の身分で日本軍の秩序安定に協力し、……その後年、保甲局長となり、壮丁団を組織し、自ら団長となって抗日勢力の安撫に努めた。日露戦争時には、辜顕栄と協力し、大量の漁船や筏に台湾海峡を航行させ、ロシア艦隊の偵察に努めた。陳中和はさらにそれを鮮明にし、イタリアから大理石を輸入し、児玉源太郎の銅像を铸造した<sup>29</sup>。

その後、建設された児玉後藤記念館の1階エントランスに置かれた。そこには後藤像もあり、児玉家と後藤家の家紋を照明装飾として現在も残されている。

## 2. 菊元商行がつくった菊元百貨店

菊元商行は岩国出身の重田榮治によって台北に創業した商社である。児玉との関連は確認できないが、義済堂とのつながり、秩禄処分に対応するために旧岩国藩内の織物の販路拡大のために台湾に渡り、台北を拠点として中国大陸や東南アジアと日本を結ぶ大商社となった。菊元商行の元従業員で構成される菊栄会が昭和42年9月に発行した菊栄会(1967)『思い出草』によれば、菊元商行は明治36年10月、重田榮治の2度目の台湾渡航のさいに台北に創業したものである<sup>30</sup>。「台湾の菊元商行は社長を頂点として、協力一致、台湾を基地として、タイ、仏印、ビルマ、ジャバ、中南支、更には満州、関東洲並びに沖縄にと大活躍を続けて、大菊元の名を大東亜共栄圏にとどろかせました」<sup>31</sup>とあり、日本の植民地拡張とともに栄えたことが示されており、その創業者の重田榮治は「戦時時点において台北洲会議員、商工会議所副会頭、或いは消防組々長等の公職に就かれた」<sup>32</sup>菊元商行はその後も発展し、「昭和6年菊元百貨店を台北

---

<sup>29</sup> 羅吉甫(2004)『日本帝國在臺灣：日本經略台灣的策謀剖析』台北：遠流出版事業、p135-136。

<sup>30</sup> 菊栄会(1967)『思い出草』岩国：菊栄会、p52。

<sup>31</sup> 菊栄会(1967)『思い出草』岩国：菊栄会、発刊にあたりを参照されたい。

<sup>32</sup> 菊栄会(1967)『思い出草』岩国：菊栄会、p52。

市栄町に建築すべく計画をたて、……日本の各地の中小のデパートの実況を視察して帰台、……而して12月1日開業せしが、全体湾、内台人の評判と信用を集め、台湾の一大名所として人気を博したり」<sup>33</sup>とあるように台湾を代表する百貨店として終戦まで存在した。

### 3. 台南の児玉像

1907年に旧大正公園内に児玉源太郎像が建てられた。旧台南州庁や気象台などが囲むロータリーの中心に児玉像は建てられた。その南西約200メートルに旧ハヤシ百貨店があった。台南駅から旧大正公園、ハヤシ百貨店を結ぶ区間は、南台湾の経済の中心地であり、その後、都市計画によって現在の形ができあがった。1946年春に破壊され、その頭部が2015年12月に市内「321巷宿舍群」内の旧陸軍官舎床下から発見された。それを台南市政府文化局が国立台南芸術大学に委託し、1年かけて児玉像であることが判明した。

しかしながら台北も台南も積極的な展示をしていない。また、その動静についてもしっかり伝えられているわけではない。それには現代台湾の政治につながる重大な要因がかくされている。

### 4. ハヤシ百貨店

本研究の協力をしてくれた陳秀琄によれば「1932年末、台北菊元と台南ハヤシ百貨店が開業した。台湾のデパート元年である」と述べている（『林百貨：台南銀座摩登五棧樓』台北：前衛出版社、2015年12月、p62）。台南のハヤシ百貨店は山口県旧佐波郡出身の林方一が1912年に渡台し、20年かけて開業した近代デパートである。終戦までのハヤシ百貨店の様子については筆者4（紙矢）が中心となって進めた「日本・台湾の4者連携による『国際メディア・リテラシー』教育活動については『徳山大学論叢』第83号（p53-67）の中で紹介しているので参照されたい。1945年の終戦まで営業が続き、南台湾の中心都市であ

---

<sup>33</sup> 菊栄会(1967)『思い出草』岩国：菊栄会、p15。



る台南のランドマークとして存在したが戦後は国府軍に接收された。日本統治の象徴のような存在の建築物であったので戦後一時使用されたものの2014年6月に台南市の史跡に指定された後、民間企業がデパートとして営業を再開するまで69年の間、その建物は温存された。

## VI. 「ポスト児玉源太郎像」としての蒋介石像

蒋介石像は、1945年10月25日の主権引き渡し後より、次第に台湾全土において建てられ始めた。その後、2000年の直接投票による第2回目の総統選挙で陳水扁が民主進歩党の陳水扁が当選すると、蒋介石の個人崇拜をイデオロギーの中核とする外省人政権への清算を実行に移す時が来た政策がすすめられた。とりわけ第6回目の総統直選が行われる1年前の2015年2月の228事件記念日以降は、直接的な損壊が続いた。蒋介石は字を中正という。台湾では蒋中正と呼ばれ、ほぼ全土の直轄市と県、市町村(市、鎮、郷)には中正路と呼ばれる通りがあるほどだ。孫文は字を中山と呼び、孫中山や中山先生と称される。中山と中正とは中華民国の法統であり正統なのである。

### 1. 銅像の政治的意味について

1945年8月15日時点において重慶に撤退を余儀なくされていた蒋介石の国民政府は、ダグラス・マッカーサー (Douglas MacArthur, 1880-1964) によって中国戦区司令として満州国や南京国民政府を含む中国大陆の日本軍作戦の前線以東のすべての回復を担うことになり、その後、国民政府内部での矛盾が先鋭化し、アメリカも国民政府を支持しない態度をとり、1949年秋、つまり朝鮮戦争勃発の前年になって、100万人余りの蒋介石国民政府(概して外省人と称する人々)を連れて台湾に撤退した。終戦の日と、この台湾撤退の日の国民政府とは、姿も形もちがうものになっていたのも、そのことをよくわかっていた蒋介石は、自らの法統や正統を主張するために孫文を持ち出し、1947年2月28日に起こった「228事件」以降、38年にもおよぶ戒厳令のもとに南アフリカのアパルトヘイトに近い、省籍矛盾をパワーとして、外省人は日本統治時代以

前に台湾の主人公であった台湾本島人（概して本省人と称する人々）に君臨しつつつけた<sup>34</sup>。これを権威主義体制と言う。銅像の政治的意味とは蒋介石個人の人格そのものを意味し、孫文像とともに台湾、金門、馬祖など全土に建てられていった。

ただし、外省人とは、全体が特権的な階層を形成していた訳ではなく、その大部分は一兵卒の軍人やその軍属であって、旧日本軍宿舎を拠点として台湾に定着し、「眷村」を形成していった。日本時代の軍関連の建造物が最近まで温存されていたのは、48万人弱の在留邦人が1946年春になって順次日本へ帰還し始め、228事件を挟んで1948年には概ね完了したので、旧日本軍関連の建物は、ほぼそのまま蒋介石国民政府によって接收された。

台湾の600万人の島民をするには、戒厳令以外に一つの強烈的なイデオロギーが必要であったので、「抗日英雄」としての蒋介石の偉業が強調された。このイデオロギーの中心をなすのが孫文を国父として、その正統的継承者が蒋介石と位置付けるために、『国父全集』や『蔣公全集』などの編纂は断続的に行われた。

ソビエト共産党型（ソ連共産党の疑似政党）の中国国民党の本質的一党独裁を成り立たせるために、中国共産党とそっくりの、…いな中国共産党が中国国民党の作法をまねたというべきであるが、…「国庫は党庫に通じている」と言われるほど、中二階式の党が国家を超越する実態は1991年に、南京において選ばれた国民代表、つまり万年議員を退職させ、国民代表や立法委員を直接選挙で選ぶようになるまで続く。蒋介石像は、「蔣公」「蔣中正」としておびたしい数が鑄造され、台湾全土に異常といえる数が建てられた。唯物史観では、銅像は統治者を善玉とし、前統治者を翻倒させた後においては、そこに存在した銅像はすべて倒されるべきものであったので、台湾光復節後、児玉像だという理由で倒されたわけではない。

---

<sup>34</sup> 蒋介石の台湾撤退の記述については、蔣経国『風雨中的寧靜』台北：正中書局、1978年、p243-279に詳細に記述されているので参照されたい。

## 2. 蒋介石像の破壊

記述の通り、台湾全土から集められた蒋介石像は慈湖に集められているが、台湾の人々によって破壊される事件がこの数年多発している。台湾のメディアでも詳しく報道されたものだけでも表1のように多数の蒋介石像が損壊または破壊されていることはわかる。

(表2) 蒋介石像損壊にかかわる事項一覧

年月(日)	内容
2007年4月	雲林県北港鎮の運動公園内にあった蒋介石像が損壊される。
2012年1月	国立中山大学の蒋介石像損壊、顔部分がへこむ。
2012年2月28日	国立成功大学内の蒋介石像に赤いペンキがかけられる事件をきっかけとし、大学は校史室内に移動。
2013年3月24日	嘉義市中正公園内の蒋介石像が台湾国家連盟などの民衆に汚損された後、慈湖紀念雕塑公園に移送。
2015年2月27日	二二八事件68周年を前に、国立陽明大学、私立東呉大学、私立輔仁大学(台北市)等や国立交通大学(新竹市)校内の蒋介石像等が赤いペンキで汚損される
2015年2月28日	基隆市獅球公園の蒋介石像の頭部を切り取られる。
	南投県中興新村内の蒋介石像にペンキがかけられる。
	台南市長頼清徳より市内の各市立中小学校内の蒋介石像を順次撤去し、同年3月21日に完了する。
2015年4月1日	高雄橋頭糖廠正門入口の蒋介石像が破壊される。
2017年3月6日	新北市万里区の蒋介石像が破壊される。
2017年3月12日	新北市中和区内の蒋介石像の頭部が切り取られる。
2017年3月29日	「台湾建国工程隊」を名乗るグループにより台北市内湖区と台北市信義区内の蒋介石像頭部が切り取られる。
4月3日	

2017年4月22日	「嘉南大圳の父」とされる八田与一像が中華統一促進党を名乗る人物によって頭部を切り取られる事件に反発した「台湾建国工程隊」が台北陽明山の蒋介石像の頭部を切り取る。
2017年12月21日	台北市の中正高中校内の蒋介石像の頭部が切断される。

(出所)自由時報、中国時報各紙記事を参考に作成した。その他にも多数あるが、損壊に至るなどのケースのみ紹介する。

### 3. 1946年以降に起きたこと～台南湯徳章公園まで

南進台湾という国策映画に台南州庁舎前ロータリーの映像が残されていて、この映像には白い児玉源太郎像がはっきりと映し出されている。そしてハヤシ百貨店に至る通りを確認できる。このロータリーは日本統治時代において大正公園と呼ばれた。現在では、自動車やオートバイの交通量が多く、ロータリーの中心部に渡って行くには、少し難易度が高く、公園と称してもにわかには受け入れがたいほど入りにくい。旧大正公園の時代は、通行するのは若干の乗用車や軍事車両、自転車、歩行者であったので、まさに公園としての機能を果たしていた。台南駅から旧末広町の中心であったハヤシ百貨店の間は、人々が憩う場所であった。

蒋介石国民政府がやってくると民生緑園と名前を変えた。民生とは、孫文の提唱した三民主義の民族、民権と民生の3つの主義の一つである。民生という語彙の語意は、日本のそれとはやや含意は異なる。日本語的に直訳するならば「中国の特色のある社会主義、共産主義」となるが「唯物史観」ではなく「民生史観」であるということが中国大陆と異なる。民族、民権、民生は政治イデオロギー、中山と中正は人物崇拜の語意であって、戦後台湾では神聖化され、人が行き交う道には「民族路」「民権路」「民生路」「中山路」「中正路」という名称に変わっていった<sup>35</sup>。

<sup>35</sup> 現在は湯徳章ロータリー（円環）とも呼ばれている。

1998年には「湯徳章記念公園」へと名前を変えた。つまり、50年という時間に2回名称を変えたことになる。

#### 4. 蒋介石と日本の関係

鈴木保昭、山崎金造(1991)によれば、

蒋介石(1887-1975)国民政府の総統。浙江奉化県の人。日本に留学し、日本の陸軍士官学校卒。1911年辛亥革命に参加、孫文の下で活躍。孫文の死後、国民革命総司令となり、1928年国民政府主席となる。以来反共政策、新文化運動を唱えた。1936年西安事件で監禁され、日華事変とともに国共合作に成功、抗日戦に努めて数多くの職にあった。戦後、憲政下初代総統に就任、アメリカの援助で国内統一を図ったが敗れて台湾に移り、本土反攻ならず没した<sup>36</sup>。

鈴木保昭、山崎金造が著した『日本・世界人名辞典』は1991年5月に第33版を重ねるほど多くの人々に読まれたが、この記述には、いくつかの改善(修正すべき)点がある。まとめていうならば「1907年に東京振武学校に入り、卒業後、日本陸軍第13師団に配属された。当時は2年間の実習を経て陸軍士官学校入学資格が与えられるため、そのコースを目指していたが、陳其美や孫文の影響を受け、辛亥の年に浙江に戻り、現地で武装蜂起の指導に取り組んでいた時に武昌蜂起が成功した」と記述するべきであった。また国共合作に成功したのではなく、西安「捉蒋亭」でつかまり、華清池で張学良や楊虎城、周恩来等に説得されてしぶしぶ受け入れたというのが正確に近いと思う。

ほとんどの人々が知らないことであるが、辛亥年に起こった全国的武装蜂起が成功し、それが辛亥革命と呼ばれ、翌年の1912年元旦に中華民国が成立し、その資金調達と世界の支持を獲得するため東京を拠点として世界中を回っていた孫文は、臨時大総統となったが、中国側の歴史考証によって1986年に広州珠江電影製片廠で制作された『孫中山』では、1911年12月31日に上海で忠実な

---

<sup>36</sup> 鈴木保昭、山崎金造(1991)『日本・世界人名辞典』東京：日東書院、p364。

支援者である宮崎滔天に日本語で500万円の融通を依頼し、それに答えて宮崎が「三井物産の藤瀬氏に何とかしてもらおう。大丈夫」<sup>37</sup>と述べた。

龔書鋒主編(1998)によればアヘン戦争後、「洋鬼」と「清妖」の結託によって太平天国はほろんだとされている<sup>38</sup>。それはその後の清朝の「半封建、植民地化」を意味するものであるが、それは外部の武力や経済力を含めた力によって清朝が次第に列強に支配されるプロセスにおいては、明治維新时期と同様に外部の富と力を持てる者となつてつながる者が盛者になる東洋的封建時代の国々の開国のプロセスにはありがちなことであつて、孫文の辛亥革命期は東京、毛沢東等の共產主義革命は欧州、ソビエトが揺籃の地であつたことから、祖国における革命を勝利へ導こうとすれば、自ずとその足元の国とのつながりを利用するようになるのは自然の摂理である。

民国の時代、ポスト袁世凱以後において、いわゆる地方軍閥を形成する軍人は、相当数が日本で陸軍を学んだ。孫伝芳や閻錫山をはじめ、著名な軍人は日本の陸軍を学んだ。蒋介石は1907年に東京振武学校で、やはり陸軍を学んだ後、樺太を中心とする北方で戦果を挙げて新潟高田に落ち着いた第13師団に勤務し、その後は他の軍人のように日本陸軍士官学校を目指していたと言われる。しかし、辛亥年の全国的武装蜂起のために1911年に帰国したが、奇妙なことにその第13師団は満州の遼陽に司令部を移す。メッケルのもとで1886年3月に臨時陸軍制度審査委員会が設置されたさいに児玉源太郎が委員長につき、その後、1887年8月に「陸軍大学校条例」が改訂されたさいに校長が置かれ、初代校長は児玉源太郎が就任、2年勤めたことから分かるように、日本陸軍の原型を作ったのは児玉であることは疑いの余地はない<sup>39</sup>。しかも台湾の主権を日本か

<sup>37</sup> 1986年公開『孫中山』珠江製片廠

<sup>38</sup> 龔書鋒主編(1998)『中国近代史幹部読本』北京：中共中央党校出版社、p57-58。

<sup>39</sup> 陸軍大学校は参謀や上級の指揮官(将官)を養成し、陸軍士官学校は尉官以上の部隊を率いる指揮官を養成を養成する。陸士の卒業生だけでも、清国からの留学生として張紹曾・蔣雁行・唐在礼(1890年7月卒)劉詢・宮邦鐸・潘矩楹・王永泉・王汝勤・孫宗先・曲同豊・吳光新・張樹元・張懷斌・賈德耀・傅良佐(1892年7月卒)盧金山・何佩瑢(1893年7月卒)姜登選・陳儀(1894年7月卒)周蔭人・唐麟・孫伝芳・朱綬光・葉荃(1895年1月卒)朱熙(1896年5月卒)王坦・于珍・楊宇霆・張煥相(1896年11月卒)王金鉦

ら受けたのは陳儀であり、彼が日本の陸軍士官学校を卒業したことなど知る人は少ない。

中華民国建国には多くの日本の陸士出身者がかかわったと言えるので、かれらを短絡的に「反日」と決めつけるべきではないのである。(注釈に日本陸軍士官学校中国人卒業生のリストを示したので参照いただきたい)

## VII. 1945年から今～の二つの児玉像と菊元商行、ハヤシ百貨店

### 1. 台北の児玉像

2008年の博物館百周年を記念して児玉源太郎像が公開されたが、その後はどのような扱いであったかは確認できていない。2008年時点では3階展示室に移され、後藤新平像と並んで2017年12月末に改装が完成し、現、国立台湾博物館3階展示室におかれている。ただ2016年春の時点では南園パークに一旦収納された状態であり、2年近い期間倉庫に収納されていたことになる。

### 2. 菊元百貨のその後

菊栄会の『思い出草』によれば、

8月15日には陛下御自ら重要放送ありとのことにて、各家族共にラヂオの前に端座して恭しく其の時を待ち居りしが、意外にも無条件降伏の止むを得ざるにいたりし旨を御涙と共に畏しくも御放送あり、人生万事休せり。……中国より台湾光復を目差し一時渡台者多く、小中汽船、戒克船、基隆淡水に幅輳せり<sup>40</sup>。

この変遷を淡々と叙述しているのであるが、終戦時の菊元の状況は、

菊元の資本金はわずかに75万円にして積立金70万円あり、如何なる方法により処理するや疑問あり。而して会社の、実価格は正味1千500万円以上にも達し壱株の価値は20倍とみて可ならん。……台湾と中国本国と

---

(1897年11月卒) 鄒作華 (1900年11月卒) 黃國書 (1907年卒) など、その後国民政府などで重要な役割を果たした軍人が多い。

<sup>40</sup> 菊栄会(1967)『思い出草』岩国：菊栄会、p28-29。

の通にも貿易局をして当らしめ、日本当時の重要物資国営の機能を継承せしめ、台湾に滞積せる、砂糖の本国積み出しに驚くほど多額の巨利を獲得せしならん<sup>41</sup>。

戦後、接収された後、何人かの所有者に所有権が移されたが、2度売却された。そのうちの一人の所有者は国外逃亡をしているなど、不明な点が多い。蒋介石国民政府が接収したはずであるが、その後、所有権が転々とし、現在は国泰世華銀行が所有している。4年前にハヤシ百貨が史跡に指定・復元され、市政府の所管となり、日本統治時代の状態で復元されたのに対し、菊元百貨店に対する関心が高まると建物そのものはガラスで隠され、その存在については触れられたくないという意向が見え隠れする<sup>42</sup>。

高雄市の中心部にあった陳啓川故居の場合、2006年7月17日に高雄市文化局が文化資産としての審査を始めると判明するや前日の16日および17日に平地にされてしまった前例がある<sup>43</sup>。

### 3. 321 巷旧陸軍宿舎の児玉像

2016年12月に児玉源太郎像であると証明された<sup>44</sup>。米軍の空襲で破壊された説と蒋介石国民政府軍が上陸した後、破壊されたという説があるが、やはり「戦後に日本文化が排除される中、(その頭部が)何者かによってかくまわれ、そのままになった可能性」が高い<sup>45</sup>。旧日本軍歩兵第二連隊官舎群の床下に隠され、現在の「321 巷藝術聚落」の建物で発見され、同所に保存されている<sup>46</sup>。この児

---

<sup>41</sup> 菊栄会(1967)『思い出草』岩国：菊栄会、p30。

<sup>42</sup> PTS 台湾公共電視「歴史懸崖邊的第一間菊元百貨」  
<https://www.peopo.org/news/348947> を参照されたい。

<sup>43</sup> 高雄市議會 HP

[http://www.kcc.gov.tw/magazine/2006\\_08/part21.htm](http://www.kcc.gov.tw/magazine/2006_08/part21.htm)

<sup>44</sup> CNA 中央通訊社 <http://japan.cna.com.tw/news/asoc/201612090002.aspx>

<sup>45</sup> CNA 中央通訊社 2015年12月22日。

<sup>46</sup> 文化部文化資産局「原日軍歩兵第二聯隊官舎群」所管は台南直轄市文化局である。  
[https://web.archive.org/web/20160327051651/http://www.boch.gov.tw/boch/download.do?fileName=/d\\_upload\\_chmp/case/defaultimage/A0/B0/C0/D821/E408/F945/1900fe8d-b50a-41af-83fb-01a2c0712896.pdf](https://web.archive.org/web/20160327051651/http://www.boch.gov.tw/boch/download.do?fileName=/d_upload_chmp/case/defaultimage/A0/B0/C0/D821/E408/F945/1900fe8d-b50a-41af-83fb-01a2c0712896.pdf)



玉像の頭部は、文化資産の一部として史跡の一部に指定されているが、2017年9月現在は特別な許可がなければ見ることはできない上、取材も許可されない。今回は文化局の葉澤山局長が直々に案内して下さった。

#### 4. ハヤシ百貨店

幸いなことに戦後、蒋介石国民政府に接收された後、製塩会社や軍施設として使用され80年代から21世紀初頭まで放置され廃墟化していた。これを頼清徳市長(当時)の政策により文化創意政策として復元されることになり、史跡としても文化的価値を高く評価されている。とりわけ興味深いのは台南市文化局が復元し、高青開発という民間会社が運営の入札に参加して落札の手続きを経て、日治時代の様子をそのまま再現して2013年に再び営業を再開したことである<sup>47</sup>。このプロセスについては一般社団法人日本民間放送連盟の「より良い放送のために」の助成事業「メディアリテラシー」に採択され、その模様は山口放送の番組『熱血テレビ!』(2016年11月7、8日)で47分間の内容にまとめられ放送された<sup>48</sup>。また、この時の模様は、FTV 民間全民電視とPTS 台湾公共電視等メディアでも放送・配信された<sup>49</sup>。

#### VIII. 銅像はもどらない(おわりにかえて)

山口県人として児玉源太郎像が設置当時の場所に戻されるのではないかとのわずかな期待を持つところであるが、実際はそれはかないそうもない。というのは台北の児玉像は、児玉後藤記念館としてつくられたとは言え、日本との関係はすでに切れている上、日本との認識が相当異なる様々な人々の政治的立場のバランスから言えば、3階展示室に展示品としての公開がせいっぱいとい

---

<sup>47</sup> 台南林百貨ホームページ <http://www.hayashi.com.tw/>を参照されたい。

高青開発 <http://www.focusquare.com.tw/>

<sup>48</sup> 一般社団法人日本民間放送連盟「よりよい放送のために」メディアリテラシー平成28年度事業 (<https://www.j-ba.or.jp/category/broadcasting/jba101686>)を参照されたい。

<sup>49</sup> FTV 民間全民電視(民視)のニュース映像を参照されたい。

<https://www.youtube.com/watch?v=TxJFsQPOZMc&t=13s>

うべきである。もとより 2008 年に再び展示された児玉像は、もともとの場所に戻されることはない上、積極的に公開するという姿勢ではなく、児玉後藤記念館として造られた現在の国立台湾博物館の建築物としての価値の方が高く評価されているために、児玉像に対する関心もさほど高いものであるとは言えない。

一方、台南の児玉像も発見された「321 宿舍群」から出されて、旧大正公園にもどされることはない。そこには湯徳章像が静かに児玉像のあった場所を見つめているからである。台湾の人々にとって、湯徳章記念公園は民生緑園、大正公園にもどすことはできないことである。

湯徳章は日本名を坂井徳章と言い、日本人の警察官を父とし、台南玉井出身の台湾人女性を母として 1907 年に台南で生まれた。日本統治時代に警察内における日本人と台湾本島人の差別的処遇に疑問をもち、父親の実家を頼って中央大学法学科を卒業し、弁護士資格を取り、台南で開業した。台南の人々の権利を守る仕事をしていたが、日本が敗戦し、蒋介石国民党軍が上陸してくると逮捕され、大正公園のこの場所で銃殺された。国府軍兵士は中国語で「ひざまずけ」と言ったとされるが、それを無視し、微笑を浮かべ最期を遂げたと伝えられる。児玉像が南を向いて立っていた場所の後ろ側に湯徳章の胸像が静かな微笑をうかべてたたずんでいるこの公園に、児玉像がもどることはないと思われる。

児玉もそうは望んでいないと思う。

### 謝辞（共著者を代表して・紙矢）

本稿を執筆するにあたり、国立中興大学文学院の元院長でわが師の黄秀政教授にきっかけをつくっていただいたことに心から御礼申し上げます。この数年の取り組みの突破口は黄教授のお力がなければ到底成しえなかった。また、長榮大学の諸先生方にお礼申し上げます。実は 2016 年春に山口放送が台北を取材したさいに撮影した映像編集集中に、開南大学の趙順文教授（元、台湾大学教授）が映し出され、旧友の登場にびっくりするやら、もっと早くわたくしに

2018年12月 紙矢：なぜ二つの児玉源太郎像と二つの山口県人創立百貨店は台湾に残ったか

おっしゃっていただけたらと思ったりで、思わぬところで思わぬ旧友にお世話になっていたのがうれしかった。

#### 【参考資料】

蒋経国(1978)『風雨中的寧静』台北：中正書局

蒋経国(1982)『我之父親』台北：正中書局(第13刷)

正中書局編審委員会(1982)『蒋経国先生言論集』台北：正中書局

陳徳仁(1986)『辛亥革命と神戸』神戸：孫中山記念館

俞辛焯(1996)『孫中山與日本關係研究』北京：人民出版社

山口県社会科教育研究会編(1982)『日本史山口県資料集』東京：日本写真新聞社(改訂版6刷)

張玉法(1988)『中国現代史』台北：東華書局

史明(1980)『台湾人400年史』(上・下)サンジョゼ：蓬島文化公司